



島嶼研究・関西西部会報告(9)その2 《スライド解説》 ラストファリズムinジャマイカ

長嶋, 佳子

柴田, 佳子

(Citation)

太平洋学会学会誌, 29:67-78

(Issue Date)

1986-01

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001831>



島嶼研究・関西部会報告(9)その2

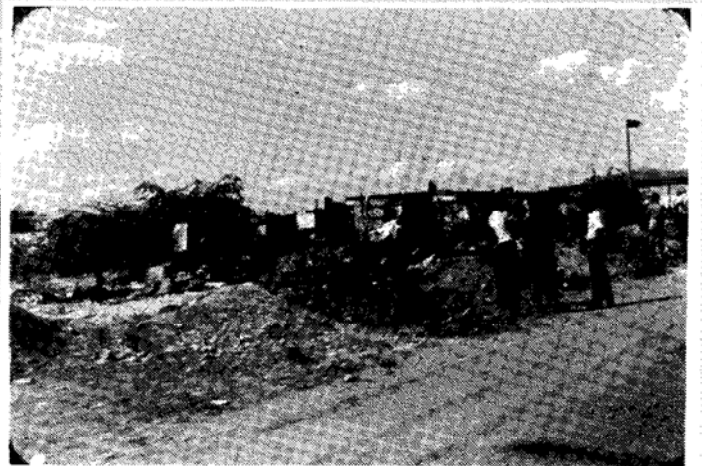
《スライド解説》

ラストファリズム in ジャマイカ

解説 長 嶋 佳 子 (撮影)



首都キングストンのダウンタウン中心部。左に大きな英国国教会の教会堂、中央に国家の英雄の一人故アレグザンダー・ブスタマンテ（労働組合運動や労働党（JLP）現与党組織の基盤作り等を通して、国民の政治意識を高揚）の銅像。その他にも幾つかの教会、商店街が並ぶ。かつての整備された美しさからはど遠い。ゴミ、汚物や悪臭に満ちた雑然とした町並みになっている。アーケードに机や椅子を並べた物売り、露店の進出が著しい。



キングストン、ダウンタウンのペンテコステ系教会と、礼拝後帰路につく信者たち。主に下層階級の人々が出席ないし会員となる傾向がある。教会へ行く時は盛装するのが慣例である。ペンテコステ系諸教会は主に一九二〇年代よりアメリカ合衆国から移入され、急速に広まっていった。このように大きな教会ではエレキギター等の楽器を用いた賛美がなされ、礼拝中に憑依も起こる。説教は大胆で大声で訴える熱狂的な調子で行われる。

キングストンのダウンタウンより郊外へ延びた道路脇は廃棄物の山となっている。都市へ出て来たが行き所もなかった者達が、ゴミの中や近辺から木片、トタン、ダンボール箱、大石等を寄せ集めて住居を建てている。このようなスラムは首都内外に広がっており、“dump”や“jungle”を合成した“Dungle”等と呼ばれ、“Majesty Pen”、“Moonlight city”等の名称もついている。彼らは生きてゆくためには何でもする（“scuffling”）。

キングストンの東九マイル、ブル・ベイにある「シオンの丘」の上に作られたラスタファリアンのコミュニティ。海岸沿いの幹線道路からも、赤、黄、緑のラスタカラーで彩られたコミュニティの外観が見える。ただし、ここに達するには急斜面の仮設の石ころも多々ある坂道を登る。「外界」との明確な境を成す、やはりラスタカラーで塗られた木塀にある門をくぐると、中の信者が中央に設置してある待合室に案内し、そこで訪問者は指示を受ける。



ブル・ベイのコミュニティのリーダー、プリンス・エドワード・エマニュエル。ラスタファリ運動が始まって二十年のうちに極わめて影響力の大きいリーダーの一人となり、一九五八年に大集会をキングストンのダウンタウンで開催。写真撮影当時六十四才（推）。ダウンタウンのBack-O-Wallに居住当時より政府と衝突し続け、特にラスタファリアンの信条・夢の一つ「アフリカ帰還」についてはその対立が激しかった。緑のローブにはハイレ・セラシエのバジも。

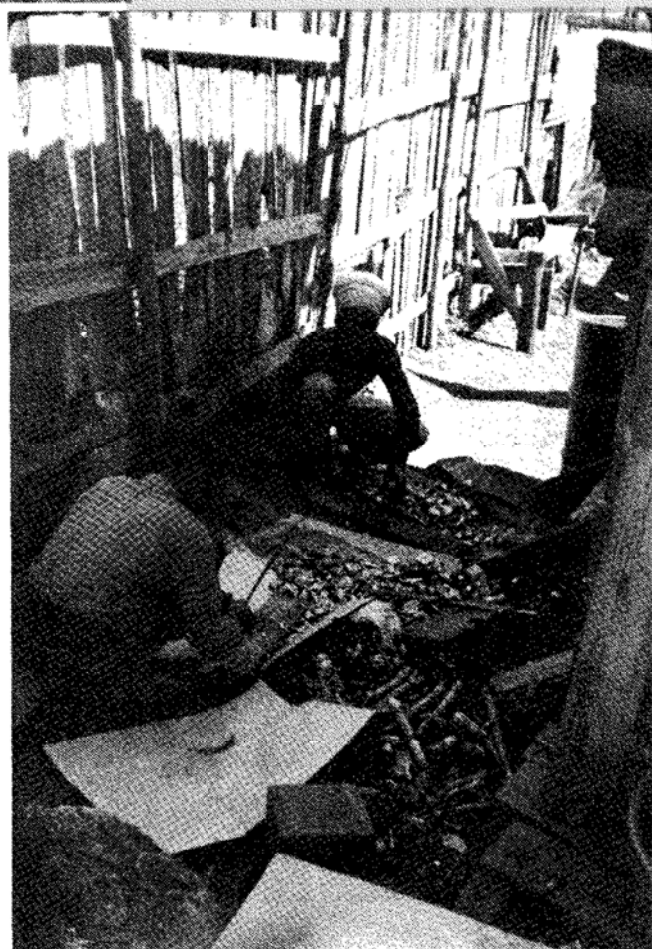
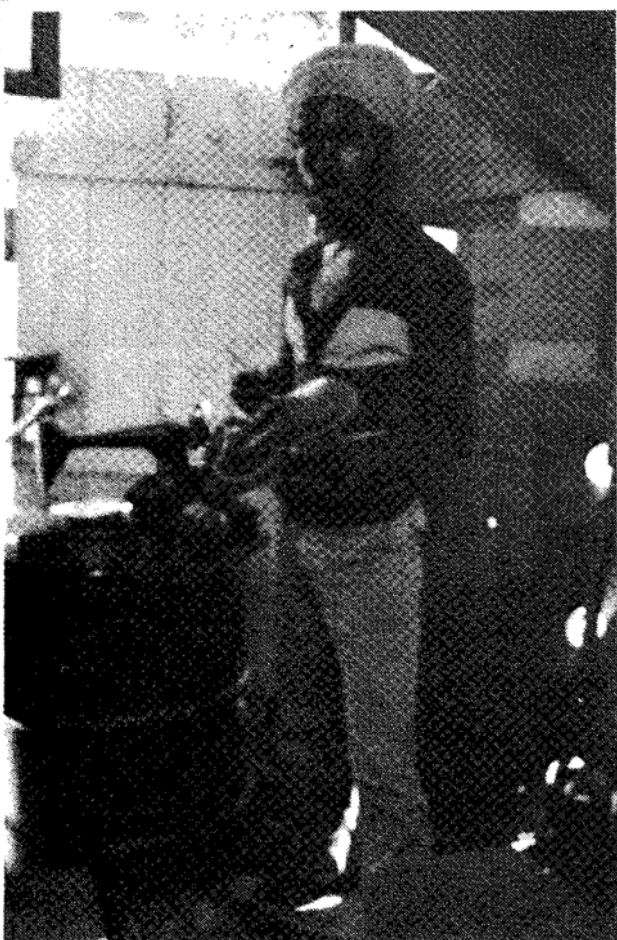


プリンスとその息子の一人。右手には神の選民、預言者の一人としての權威を示すとされる大きな「羊飼いの棒」。ここに小さく聖書の言葉等をラスタカラーで記してある。彼の住居は最も高い所に作られ、外観は全てラスタカラー。南方の海がよく見晴らせる彼のみならず多くの信者は、海の彼方から救いの船が来て、じきにアフリカへ連れ帰ってくれると信じている。左後方の丘の向こうの浜辺にも別のラスタの小さなコミュニティがある。





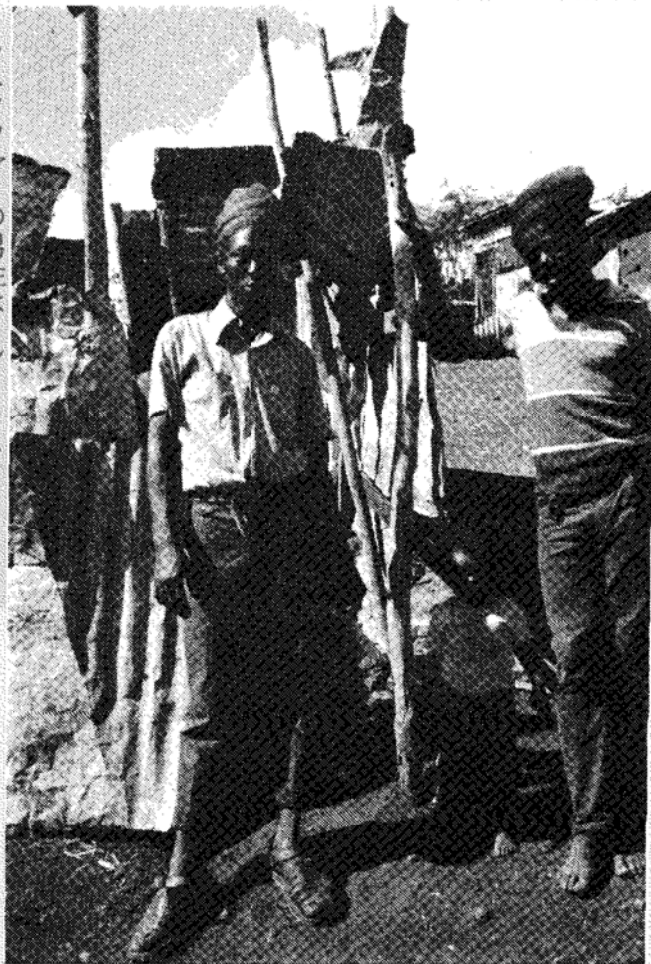
プリンスのグループの「正式」名称は長いが、略して「エチオピア国際会議」。通称は「ボボ」。このコミュニティに入れた者は各自トタン、木片、板、ボール紙等で住居を建てる。メンバー数は約二百人と彼らは言うが、実際に住んでいるのは数十人程。圧倒的に十代後半と三十代前半の男性が多い。北端に「女性小屋」(月経小屋)はあるが、月経期間中のみならずその前後数日(人によっては一週間程)も汚れているとされ、タブーも多く、女性は少ない。



食事は当番制。オレンジ、バナナ、サトウキビ、サワーサップ(果物)、ビート等のミックスジュースやビスケットを御馳走になったが、彼らの食生活は自然主義の菜食主義者。旧約聖書の訓戒を厳密に守り、肉食はタブー。主要タンパク源は豆類(うるこのある小さい魚も食べる者は多い)。食事は汚れてはならないので、汚れている者、特に月経期間中の女性は調理場に触れても近づいてもならず、共に食べられない。また塩も使用しない。このような独特の食物を「ital food」という。

彼らの生計手段は皮革製品(写真のは靴)、「繊維」製品(マット等)、ほうきといった手仕事为主体。なかには足踏みミシンも所有している者(写真)もいる。基本的には全て共有で、私有の観念を否定したがる。ただしトランジスタラジオのような高価な物を所有している者もいて、所有主は特定個人ではあった。製品は外部社会に売りに行き(行商)、得た現金で食料品、石けん等「生活必需品」を買って帰る。町中での行商はまた説教の機会ともなる。

ラストファリの男性はノン・ラストよりも子供への愛情も強く、育児に責任を持つ傾向がある。このコミュニティ内にも子供の姿はよく見られた。「ボゴ」は全員きちんとラストカラーの布で頭を巻き髪を見せない。他のラストよりも清潔感を与えるような身だしなみと、マナーの良さ等のため、一般に外部社会から好感さえ持たれている。おとなしく内靜的な者が多かった。通いで儀礼に参加する者もいた。彼らは老年のリーダーを神聖化しがち。



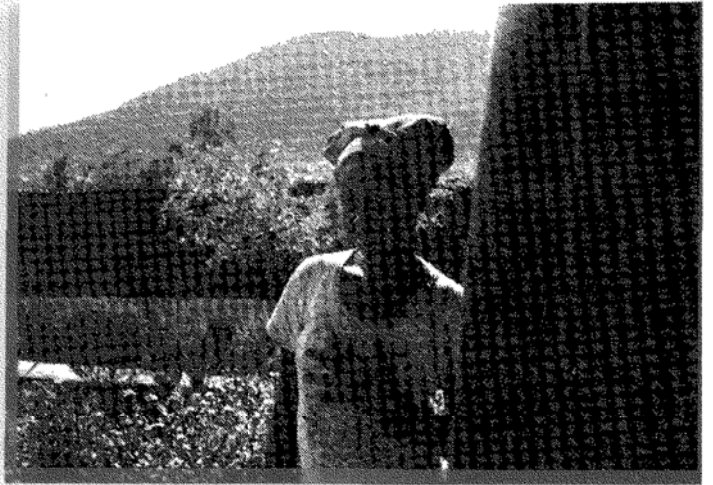
一月七日より二週間、「エチオピアの伝統に則って『クライストマス』が行われる。儀式に参加するために盛装した「司祭」と「預言者」。要職の長衣は全てラストカラーと白、黒（赤、黒、緑のコンビはガーヴェイ〔後述〕派のもの）を使用。中央の白いローブにラストカラーの長ベルトを首からかけた男性は、この時の実質上のリーダー的役割を果たした。胸にはセラシエ帝のバッジをつけている。儀式の開始時間はほとんどの者が準備できてから。



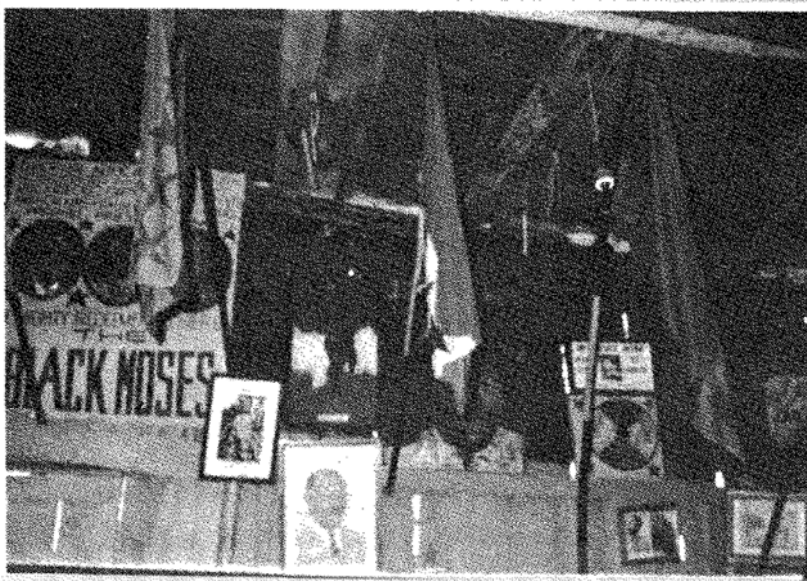
儀式はたいいてい3種類のドラム（各一台）がしばらく叩かれてからおもむろに始まる。キリスト教（バプテストないしメソヂスト派が多い）の賛美歌集と聖書が机の上にある。歌詞の単語、発音を彼ら独自の世界観に添う形に変えて使用。七人（ユダヤ・キリスト教の伝統では完全数）の「司祭」が説教壇のある東（日の出づる聖なる方角——祈りを捧げるのもこの方角）に向かい右手でシャッカを振り、リズムをとりながら賛美。その他の「預言者」や参加者も賛美中。



数少ない女性メンバーの一人。お互いに顔を合わせると「My load is low.」等と言いながら手を胸に当てて挨拶する。ラストの女性は概して寡黙で、男性より見知らぬ者への警戒心は強い。ラストになる動機は失恋、交際中の相手が多かった。女性は男性に従属する存在と見做される傾向が強く、またこのコミュニティ内では諸規制が多くあり、長期間滞まる者は少ないようである。六十才代後半とおぼしき老母「プリンセス」はひとりいた。

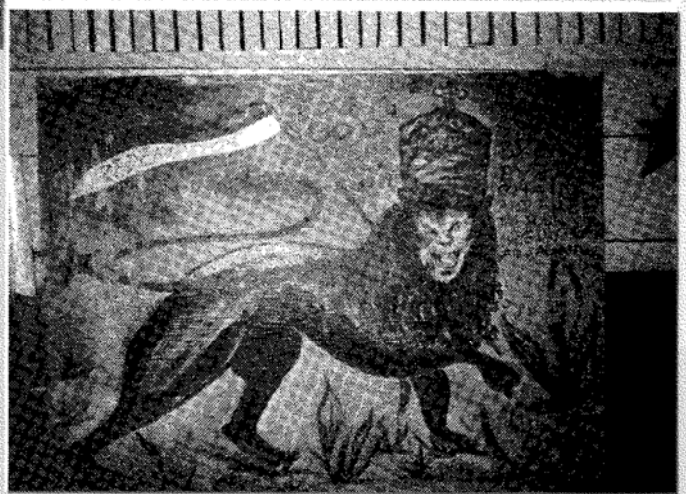
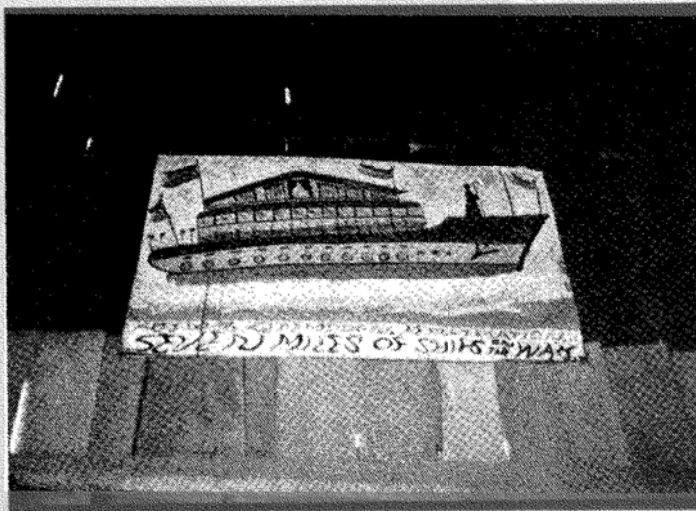
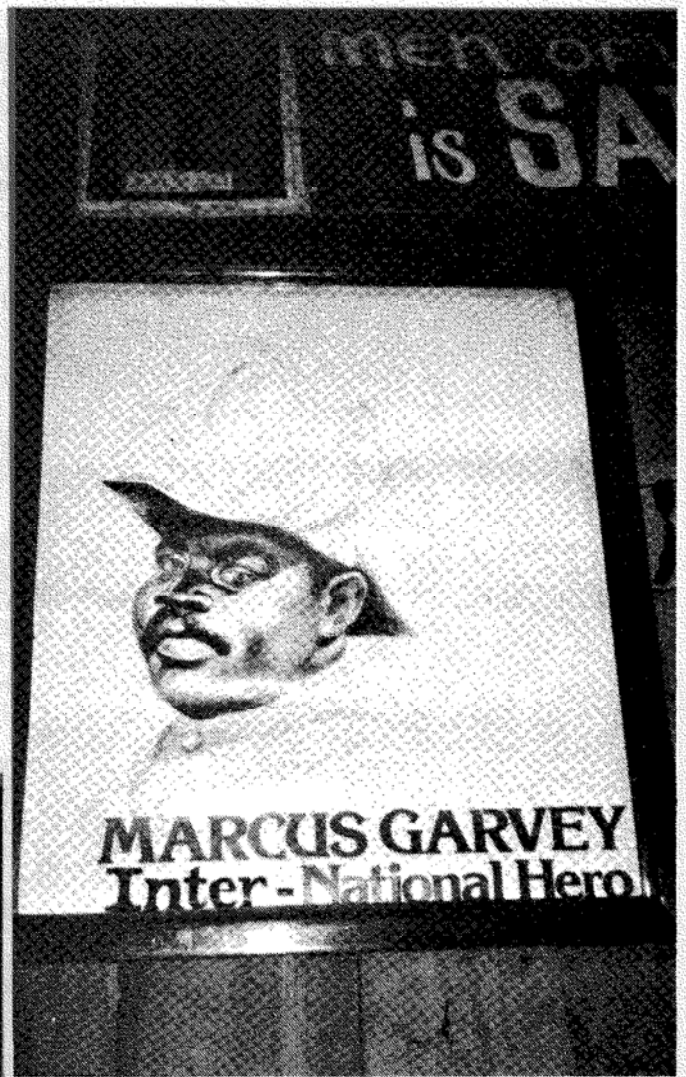


プリンスの居住区のある中心的建物には、特に念入な装飾（主にラストカラーを使っているもの）や重要な聖書の言葉やモットー、信条が戸、壁の至る所に書かれている。「愛は神なり、共に愛し合おう」「基本的自由、贖い、帰還、自らの家で安らかに」、その他十戒や国連憲章は最も好まれるものの幾つかである。このグループはラストファリアンとしての人権擁護を、敵対する政府よりも国連に訴えるという手段をとり、国連の旗もはためく。



重要な儀礼用品、「神」（故セラシェ帝）、偉大な預言者Ⅱ先駆者マールカス・ガーヴェイ、十字架上の黒いキリスト像等の写真ないしは絵、ラストカラの旗（一般に赤Ⅱ血（特に殉教者の）、黄Ⅱ太陽、富（豊かさ）、緑Ⅱ自然（界の草原）、勝利への希望）、ガーヴェイ派の旗（黒Ⅱ人種、星形Ⅱガーヴェイの設立した黒星汽船会社）が見える。これらの多くの物は「聖なるもの」であり、きちんと管理され、また外部の者にやたらに見せてはならないとされる。

マーカス・M・ガーヴェイ（一八八七—一九四〇）の肖像画。一九五二年に国家的英雄とされる。この絵では「国際的」英雄とさらに昇格している。ガーヴェイ無しにはラスタファリズムは発生しなかったとまで言われ、ガーヴェイ派の多くはラスタファリズムに吸収されてきた。セラシエ帝の登場は「アフリカを見よ、黒人の王が戴冠される。解放の日に近い」等の彼の有名な預言的言葉が成就したと解釈されている。UNIA設立等を通して主に合衆国で活動し、黒人意識を高揚させた。



の鎖を解き放つ」解放者の役割を担う。ライオンは常に黒。

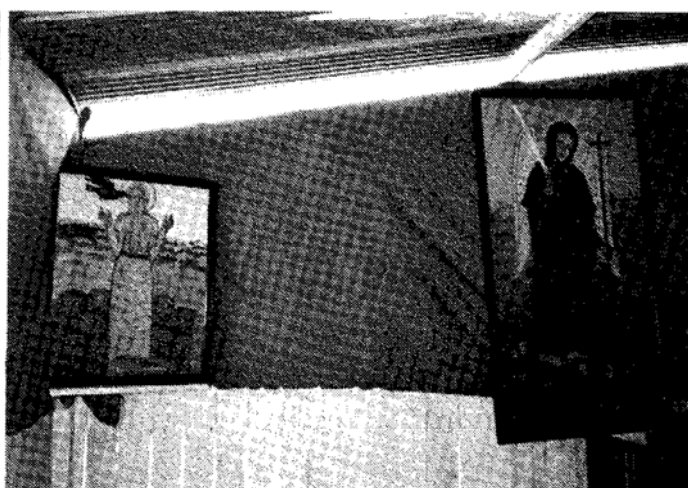
ガーヴェイが一九一九年にNYで設立した黒星汽船の象徴的表現。作者不明だが、ラスタカラーの船にラスタの旗が立てられ、先頭にリーダー、プリンスの黒装束の姿も描かれている。この船会社は経営の失敗で四年後倒産した。ジェット機の時代になっても船による救済のイデオロギー（奴隷制時代にまで遡りうる）に固執しているのは、コミュニティが海を見下ろす位置にあるという立地条件と共に、リーダーの高齢化による保守性の顕在化も一因している。

同じ保管所にかけてあるラスタファリ独自の象徴的絵画（作者不詳）。黒いライオンがセラシエ帝戴冠時の冠をつけ（頂に十字架）、ラスタカラーの旗（自由、贖いの文字が見える）を右足に持って、アフリカの草原を進んでいる。黒い星も見える。百獣の王ライオンはアフリカ、エチオピア、セラシエ、男性、支配、力の象徴だが、聖書中の表現（ユダの獅子）等）にも結びつけられ、「全て



このコミュニケーションに加わりたくてプリンスの面会を求めて待っているラスタファリアン。彼らのように髪を伸ばし櫛を当てないものをドレッドロックス (dread locks)、彼らを総称してロックスマン、ナティ・ドレッド (natty dread)、また単にドレッドと呼ぶ。運動初期のリーダーの一人L・P・ハウエルを中心に作られたビナクルと呼ばれるコミュニケーションで考案されたと言われ、キングストンでは一九五七年頃より現れた。彼らを典型的な姿と見る人も多い。

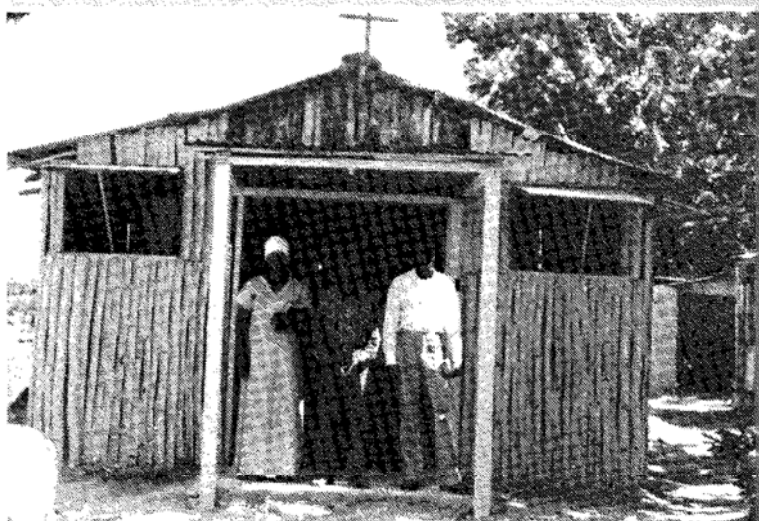
エチオピア正統教会の本部。中央が木造の礼拝堂（八〇年より主にこの建物自体や聖所、備品等の保管上の理由でコンクリートの建物を造り、儀礼の中心は移った。現在は聖書や教理の学び、聖歌隊の練習等に使われる）。ラスタファリをキリスト教の傘下に入れて「問題」を解決しようとした政府の奨励で、一九七〇年にジャマイカ支部が設置され、数千人が洗礼を受けたとされているが、通常の礼拝出席者は百人前後。エチオピア人司祭や教師がいてアムハラ語も教える。



礼拝堂内にかかっているコプト教の色彩濃い聖画。礼拝中は至聖所とを隔てる垂幕が開けられ一般信徒からも見える。至聖所や最も重要で神聖視される契約の箱は礼拝後は見られない。儀礼はエチオピアの伝統を簡略化したりジャマイカに合うよう適用されているが、全員で唱和する文句にはアムハラ語も使用。ラスタファリが引き寄せられたのはエチオピア起源、教会名、神秘的雰囲気等によるが、教会側はあくまでキリスト教の立場で一線を画している。

エチオピア正統教会のキャンドルライト・サービス。聖歌隊を先頭に礼拝堂の周りを時計回りに行進。楽器奏者以外は全員ろうそくを持った。聖歌隊も原則的にはラスタカラー（緑のローブと帽子、赤のたすき、黄色ないし金色の装飾）。白もキリスト教の影響で豊富に用いられる。信者も白い帽子と服装の者が多い。賛美はコンゴ・ドラム、フンデ・ドラム、シストリン（エチオピアの教会儀礼用ガラガラ）、フルートないしサクソフォンが中心。賛美歌使用。

左端男性は礼拝堂の「門番」で、白の長袖の上下と靴。黒の警帽と短い木棒を持ち、ラスタカラーのたすきをつけている。礼拝中出入口（建物の後方、両脇）に立ち、中の人員の整理役。特に前方に座ることになっている子供たちのマナー監視、教育にあたる。彼の右側女性二人は新来客。真中はグァダルーブ、右端はマルチニーク（両方とも仏領海外県）島出身。両島ともにラスタファリアンないしその影響は社会・文化的に認められている。



エチオピア正統教会のキングストン市内（スラム地区）の第二教会。出席者は設立後間もない八〇年で二十人前後。ジャマイカ人の説教師は大きな車で乗りつけていた。本部の「聖三位一体教会」の最初の会堂と似た造りではあるが、両脇の出入口がなく窓のみなので内部はより薄暗い。儀礼用楽器はフンデ、ベースドラムとシャッカ（マラカスに似たもの）だが、演奏は技量不足が目立った。同教会の支部はその他八カ所以上あり、全島を回って出張中であつた。

ラスタファリの画家ラス・ダニエル・ハートマンと息子と娘。ブル・ベイにある彼の家の裏庭で夕食用の豆を洗っている。彼のドレッドロックスも立派。洋服も家のあちこちも自作。菜食主義で菜園もやり、公的に禁止されているガンジャ（マリファナ）もあった。彼の妻はジャマイカ人ではないが、ラスタファリの自然主義的生活様式に感銘し、食・医に関する知識は豊富であつた。「結婚」生活は短く、彼は神の与え賜うた子供を引き取っていた。



ラス・ハートマンの作品は国内でかなり知名度も高く、その独特の表現様式に称賛も多く寄せられている。細密な写真主義とラスタファリ信条の主要テーマや象徴を見事に合体させたものが多い。好んで使用される色はやはり白、黒、赤、緑、黄が主体である。抽象度の高い表現の中に数多くのメッセージを含む方法を取り、この絵にも怒れる黒人、ライオン、鍵、巻き物（神の書）といった象徴が描かれている。彼はジャマイカでプロデュースされた最初の映画「ハーダー・ゼイ・カム」にも出演していた。

一九八〇年にキングストンのデヴォン・ハウス（十九Cに建てられたコロニアル風大建築物）の中庭で行われた最初のラスタファリ・フェア。才能あるラスタ達絵画、彫刻、皮革手工芸品（バック、靴、サンダル、ベルト等）、服飾品（自分で作った服からアフリカ大陸、セラシエ、ライオン、ガーヴェイ等のプリント付Tシャツ、ラスタカラーその他の毛糸や布製帽子、パッチ、ベルト等）、楽器、水さし、壺等のひょうたん製品等売り、宣伝していた。



著名なリーダーの一人ラス・ボアネルジー。自宅（スラム地区）で夕食の豆を選別中。彼のドレッドロックも

かなり長く、帽子（緑の布製、ラスタカラーの線の模様入り）をかぶるために、渦高く積み上げまとめている。手前のクンデ・ドラム

は自製。やはりラスタカラーで胴部分を装飾。パチの頭は布を丸めて木の棒につける。西インド大学のマスコミユニケーション学部と大学内放送局、社会学のスタッフが共同で彼の撮影をしていた。



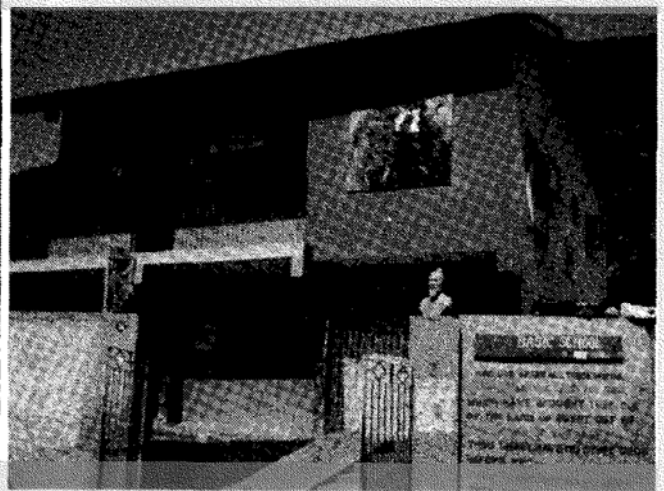
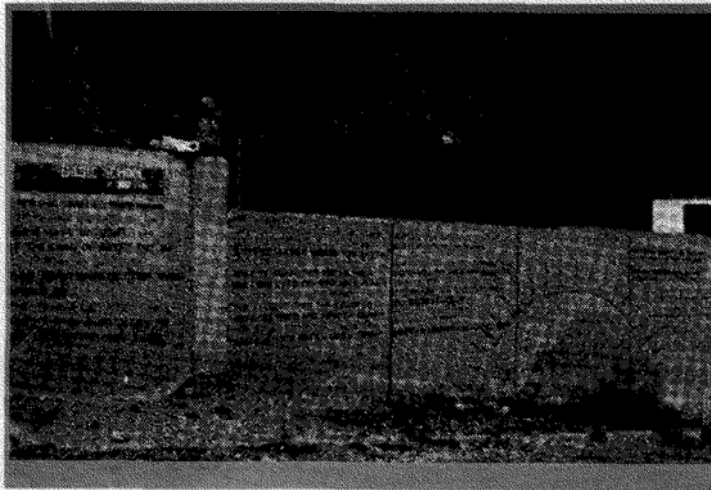
フェアで「店」を出した著名なリーダーの一人ラス・ヒストリー。日頃はキングストンのダウンタウンで同様の

商売をしているが、売上げは多くない。頭から足までラスタカラー。彼はラスタファリ運動協会(RMA)の設立・推進者の一人で、極めて政治的関心が深い。機関誌 Rasta Voice の発行にも携わり、政治運動としてラスタの政治意識の高揚、政治参加を目標の一部とする。この日ファッションショーも兼ねた音楽パフォーマンスの中で、彼らを代表して演説をした。

キングストン郊外の人里離れた一軒家に住むラスタファリの一家。家にベイス、クンデ、リビータードラム各一台（これで儀礼ナイヤビンギを行う一セット）を持ち、やはり胴部分はラスタカラーで装飾。ラスタカラーの旗や大きな立看板もあり、ライオンやセラシ



エ帝の肖像画、象徴的の字句が書き並べてある。右のラスタは「聖なるハーブ」ガンジャを吸う準備をしている。乾燥させた葉や殻を細かく刻み、紙で巻いてタバコないし葉巻状にしたり、水パイプにつめて回し飲みしたりする。



塀には象徴的絵画表現（空色の太陽を背景にグループが音楽儀礼ナイヤビンギを奏しんでいるもの、その他にピンクを背景に黒人の踊りを抽象的に表現）や聖書の十戒の文句をラスタカラーで書き連ねてあったりする。これらはこのグループが出しているレコード「Tales of Nos-ambique」のジャケットにも印刷されている。現在オシーの息子の一人タイムが父親譲りの才能を発揮し中心的ドラマーに育ってきている。このグループの音楽演奏を通じて、ラスタファリの知名度は上がり、徐々に社会的汚名を脱してきた。

カウント・オシー&ザ・ミスティック・レヴェレーション・オヴ・ラスタファライというグループの活動拠点コミュニティセンター。東キングストンのスラム地区に政府の援助（実質はさほどでないと言われる）で建てられた。門の右側の胸像が故カウント・オシー（ジャマイカのマスター・ドラマーとして名を覇せた）。図書室やベージック・スクールも兼ね、音楽・美術・手工芸（裁縫も含む）・舞踊を学べる。日曜日夜にグループの儀礼が開かれる。

ベーシック・スクールに来て子供たち。制服は支給される。女教師二人はボランテニアだったが、あまり情熱は感じられなかった。子供達のエネルギーは溢れんばかりであったが。壁に国家的英雄（P・ボーグル、W・ゴードンの姿が見える）の肖像画もかけられている。英国式の学校教育制度を採り、いわゆる1F（イレヴン・プラス）がある。近年までジャマイカに無関係の内容の教科書が使用されたりした（例えば「雪は冷たく、白い」等）。大学進学者はまだ少ない。



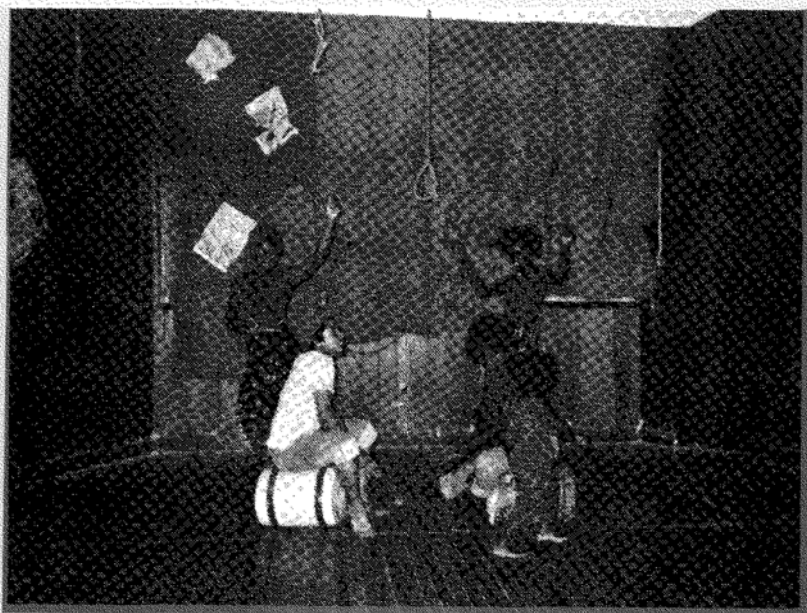
セドリック・ブルックス（中央、サックス奏者）とユナイテッド・アフリカのメンバリーの演奏。セドリックの庭で月一回日曜日夜、オーブン・セッションが開かれる。彼の家族の手作りのアITAL料理や飲料も売られる。近所か

らも多く集まり無料コンサートを楽しむ。音楽と舞踊が中心で、時にアクロバット等の見世物的余興も入る。このグループではノンラスタのメンバーもいるし、一般にラスタの間でタブー視される女性ドラマーもいる。



セドリックとユナイテッド・アフリカが演奏する時によく登場する少女のダンス・グループ。かなり訓練された技術的にも高い見事な演技を披露する。黒人独特のバネのきいたリズム感溢れる「アフリカン・ダンス」である。衣装係もいて、彼らのルーツである西アフリカの民族衣装の特徴を盛り込んだコスチュームを用いる。同様のダンス・グループをミスティック・レヴェレーションのコミュニティーセンターでも養成している。これらのダンサーは女性のみ。

ラスタファリ運動が社会的に受容され始め、レゲエなどのラスタの影響を強く受けたボビュラー音楽も盛んになると、ジャマイカ社会の被抑圧層の文化的表現も盛んになってきた。彼らの訴えの声を音と身体表現で象徴させるものだが、アフロ・ジャマイカ文化を取捨選択して混合し表現している。このパフォーマンスは大学の教室を借りてのものだが、レゲエや祖先崇拜クミナのドラム使用法を組合せている。囚われの身を象徴する首吊り縄等も見える。



カーヴェイの出身地セント・アン行政区の山奥に住むラスタファリの家族。訪問すると遠来の珍客へ特別に飼っている鶏一匹料理してくれた。ラスタの多くは肉食禁だが、ここではさほど厳しくない。主婦はガンジャを吸っている。家族全員ドレッドロックス。長女は学校でロックスゆえいじめられるという。貧乏人の子沢山。しかもラスタは神の恵みとして子供を考え、産児制限を悪魔的行為とみなすので彼女も出産・育児の繰り返し。

ラスタファリのナイヤビンギ儀礼音楽の起源の一つ、ブル音楽を演奏する人達。楽器の種類、名称は同じで、リズム・パターンも酷似している。ブルについては不詳な点も多いが、昔は祖先崇拝に結びついていたらしい。現在は宗教的要素は無く、コミュニケーション音楽としての機能を持つ。歌詞は以前アフリカ部族語も多く含まれていたが、祖先が次世代に継承しなかったため、ほとんど忘れられている。刑明の元囚人を迎え入れる歌などがあった。

